

第10回 Scale tone motion

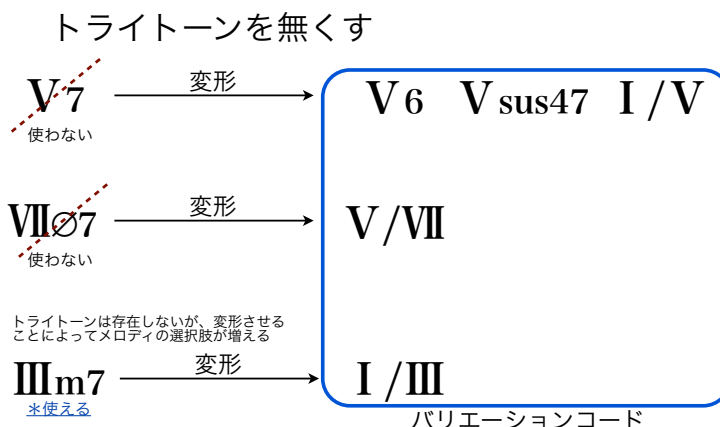
Scale tone motion

日本語で言えば「音階的な音の動き」。すなわち、Diatonic 7th chord上でとなりに移動する進行のことです。

※重要

スケールトンモーション時にはトライトーンをなくすことが必要。

トライトーンを含むV7はIへ、VII \emptyset 7はIII7へ進行するエネルギーが強く、その他のコードへ進むと違和感が発生します。そこでトライトーンを含むV7とVII \emptyset 7は変形する必要があります。また、III m7も変形して用いられることがあり、変形されたコード群をバリエーションコードと呼びます。なお分数表記のコードは分母=ルート 分子=和音(コード)を示しています。



G7 G (トライアド) G6 Gsus47 C/G (Gsus46)

バリエーションコード

B \emptyset 7 G/B G6/B

バリエーションコード

Tips : 6コードとsus4コード

6コード

メジャートライアド、もしくはマイナートライアドにM6を足したコード。構成音でみるとG6=Em7となるが、ルート(Bass)の位置が異なることでコードそのものが違うということが大事です。

$$\begin{array}{l}
 \text{メジャートライアド} = R + M3 + P5 \\
 \text{マイナートライアド} = R + m3 + P5
 \end{array}
 \left. \vphantom{\begin{array}{l} \text{メジャートライアド} \\ \text{マイナートライアド} \end{array}} \right\} + \text{M6}$$

(m6ではダメ、違うコードの意味になります)

D7Cでは I6 IIIm6 IV6 V6がある

sus4コード

本来M3のものが一時的にP4が使われているコード。この時のP4をsus4と呼びます。sus4は日本語で「掛留音」とよばれ、前のコードのm7音そのまま引きずられて持ち越された音です。基本的には本来のM3を持つコード型に解決します。(単独のコードとして用いてもかっこいい)

The diagram illustrates the resolution of a Dm7 chord to a Gsus47 chord, followed by a G7 chord, a Csus4 chord, and finally a C chord. The m7 of Dm7 (F) is carried over to become the sus4 of Gsus47 (F). The m7 of G7 (F) is carried over to become the sus4 of Csus4 (F). The resolution of Gsus47 to G7 is labeled '解決' (Resolution). The resolution of Csus4 to C is also labeled '解決' (Resolution). The carried-over notes are labeled '引きずられて持ち越された音' (Carried over note).

D7CではIsus4とVsus47があります。なおIsus4△7はトライトーンが作られるので流派によっては認めていません。sus4を用いると独特の解決が遅れる感覚が発生します。Vにおいては積極的にsus4サウンドを用いたほうがかっこよくなります。

なお、VII \emptyset 7からの絶対進行先であるIII7にもsus4を用いることができます→IIIsus47

Scale tone motionを使ったコード進行

ex.1 (IV-III-II-I)

F△7 | Em7 | Dm7 | C△7

ex.2 (IV-V-VI)

F△7 | G6 | Am7

Em7→C/E G6→Gsus47, C/G の使用も可能。

※スケールトーンモーション下行形

||: C | G/B | Am7 | G6 | F△7 | Em7 | Dm7 | Gsus47 G7 :||

Diatonic dominant motion

沢山のヒット曲に使われる非常に重要な進行

この進行はカノン進行(バロック期の代表曲：パッヘルベルのカノン)のベースを変化させたものとも見れる。

||: C | G | Am | Em | F | C | F | G :||

カノン進行

下行形のマイナーヴァージョン

||: Am | G6 | F△7 | Em7 | Dm7 | C△7 | BØ7 | E7 :||

Diatonic dominant motion

コード進行の構築においては循環コードを基礎として、Diatonic dominant motionとScale tone motionを用いて発展させればまず違和感のないコード進行になるはずですが、もしも、この手法で違和感が発生するとしたら「メロディのストーリーとコードが違う」「コードの時間軸上の配置が狂っている」ことが原因に考えられます。

etude DDM & STM

Intro

Chords: C Δ 7, F Δ 7, Em7, Am7, G6, F Δ 7, Em7, Dm7, G7^{sus4}

A

Chords: G7, C Δ 7, Am7, F Δ 7, G7^{sus4}, G, Em7, Am7, Dm7

B

Chords: E7^{sus4}, E7, Am, G, F Δ 7, F Δ 7, G7^{sus4}, G7, Em7, Dm7, G7

Sabi

Chords: Em7, Am7, Bø7, E7^{sus4}, E7, F Δ 7, Em7, Dm7, C Δ 7

Outro

Chords: F Δ 7, Em7, Am7, Dm7, G7, C Δ 7